

暁木会会員 各位

平成 26 年 12 月 吉日

暁 木 会

<http://www.gyoubokukai.jp/>

平素は、暁木会の活動にご支援とご協力を賜りまして厚く御礼申し上げます。
今回の暁木会ニュース第 28 号では、『先生方の研究の取組み』、『暁木会助成金による海外
インターンシップ』、『土木技術者(学生)獲得の大学の試み』という暁木会の新たな取組
み『新制26回生同窓会』、『現役最前線』、『大阪あかつき会』等、会員の皆様から寄稿して
頂いた記事を掲載しております。ぜひご通読頂けますようお願いいたします。

「市民工学セミナー」の開催

市民工学専攻研究推進 WG 主査 喜多 秀行

本年 9 月から市民工学専攻教員による「市民工学セミナー」を開催しています。市民工学
専攻に所属する教員は、それぞれ「〇〇さんは構造の専門家」、あるいは、「××さんの担当
科目は△△」という程度にはお互いのことを知ってはいても、「いま、何を研究しているの
か」、「世の中のどんなところで活躍しているのか」、「これから、どのようなことをしよ
うと考えているのか」といったことについては、必ずしも知らないことがありました。そこで、
最近取り組んでいる研究テーマはどういうものか、それを取り巻く社会的・学術的環境はど
うなっているのか、今後どのように発展させようとしているのか、などについて互いに紹
介し合う場を設けることにした次第です。また、近年は大学の財政状況も厳しく、特に研
究費は、文部科学省科学研究費補助金をはじめ外部のさまざまな競争的資金を獲得するこ
とにより賄っているため、共同研究の可能性を探る、という意図もあります。

これをお読みの方々と同様、大学の教員も時間に余裕がないため、“短時間でいろいろな
人の話を聞くことができる”やり方をとることとし、各回 1 人 10 分（紹介 5 分、質疑 5
分）で 1 回 6～7 名、全体で授業一コマ（90 分）に収まるようにし、教室会議の前後の集
まりやすい時間帯に開催しています。5 分という限られた時間でコンパクトにエッセンス
のみを知ることができる上に、みな結構同じような問題意識を持っていたり、思いのほか
近いことをやっていて互いの研究を組み合わせるとさらにおもしろいことができそうだと
実感されるなど、なかなか有意義なひとときです。時間が足りなければ終了後（あるいは
後日個別に研究室に立ち寄って）議論の続きが気軽にできるのも利点です。

今年度は 9 月、11 月、12 月の 3 回開催する予定としています。本稿執筆時点で終わって
いる第 1 回、第 2 回での研究紹介の概要を各教員にまとめてもらいましたのでご覧下さい。

■内山雄介：沿岸域巨大災害緊急予報システムの開発 人口や資産が高度に集積した沿岸
域は、高波・高潮・津波などの災害リスクにさらされている。気候変動の影響に伴う台風
の大型化・頻発化、想定される南海トラフ地震津波など、増大する巨大災害リスクに迅速
に対処するべく、これらの巨大災害に対する緊急予報・再解析を高解像度かつ短時間で実

行可能なシステムを開発する。システムのコアとなるのは内山が開発者の一人として関わっている領域海洋循環モデル ROMS、NCAR などによる領域気象モデル WRF、第 3 世代スペクトル波浪推算モデル SWAN/WWIII であり、「京」などの大型計算機を活用する。

■芥川真一：On-Site Visualization と光ファイバー 芥川研究室では、計測した情報を、その場所で可視化できる装置の開発と実社会への適用を通じて、人間環境の安全・安心化に貢献するための活動を展開しています。最近では、その目的に適合する装置のうち、低コスト・低消費電力型の方法論を重点的に開発しており、その中でも光ファイバーの新しい利用方法を開拓するための共同研究に重点を置いています。この方法では、地盤材料、地下水、海底の砂、グラウト材料、建設材料の劣化などに伴う光の状態変化を読み取ることで、これまでとは異なる新しいモニタリング手法の構築が可能となります。

■河井克之：空気相の影響を考慮した地盤構造物の品質評価 河川堤防や盛土などの陸上地盤構造物さらには自然斜面も内部に空気相を含んでいます。豪雨による洪水時に、河川堤防内部の空気が浸透によって破裂的に押し出されるエアブローを生じ、破堤に至る事例や、土石流発生前に異臭や異音がするという事例は、内部の空気の流れが構造物全体の安定性に大きく影響を及ぼしていることを示唆しています。ここでは、地盤内部空気の圧縮挙動に注目し、地盤材料を三相混合体として精緻にモデル化することで、降雨などの外水位変動による構造物の品質変化を予測することを目的にしています。

■川谷充郎：橋梁交通振動とヘルスマニタリング 橋の移動荷重による動的応答、すなわち橋梁交通振動に関わる研究に長く携わってきたが、近年は環境振動影響あるいは橋梁振動モニタリングに発展している。さらに、地震時に高架橋上にある車両が構造物に対してダンパーとして作用する場合のあることを解析的に明らかにしている。出身研究室の教えから「研究の道具を自前で創る」ことが信条であり、模型実験装置および数値解析プログラムを手造りしてきており、それらは研究財産となっている。また、ヘルスマニタリングに要する無線加速度センサを塚本昌彦教授(電気電子工学専攻)と共同研究で開発している。

■四辻裕文：地域交通の安全・安心 テーマの一つ目は、クルマの速度超過事故を予防するための路面表示の規格開発である。車速に対する運転者の知覚に系統的な誤差が生じる運転状況を前提とし、運転者の認識構造と道路の幾何構造と路面表示の配列効果との関係を知ること、事故予防に資する高度化を目指す。二つ目は、移動目的地が集約した地域において高頻度のマイカー運転者が迂回して低頻度の交通制約者を同乗させるという短距離ライドシェアリングのシステム設計である。運転者の思いやりや同乗者の気兼ねという利他心の相互作用やマッチングのキャンセル阻止を考慮した持続可能な制度の設計を目指す。

■飯塚敦：地盤解析学の現状 地盤解析学とは、数理的論理体系に立脚した地盤力学（土質力学）によって、地盤の力学的挙動を予測しようとする技術体系とする。そもそも予測とは、将来起り得る現象を事前に知ろうとする行為であって、過去や現在の現象を分析して、その延長線上で将来を知ろうとする統計論的外挿とは一線を画する。何らかの物理的な指導原理に基づいて、「昨日の延長線上にある今日だが、ひょっとすると今日とは違う明日があるかもしれない」を明らかにしようとする。このセミナーでは、この地盤工学における予測を論じ、地盤工学ならではの課題についても紹介した。

■小林健一郎：広域洪水モデルの開発 近年、大量の地形、水文データが整備されてきているため（ビックデータ）、日本のみならず、世界中のどこでも訪問することなく一定のク

オリティーの洪水モデルが開発できる状況になっています。無論、現地のグランドトゥー
ースがなければ、完成というわけにはいかないのですが、広域洪水モデルにより世界の洪
水問題について考えることが可能になります。また、これらのモデルは京コンピュータな
どによる大規模計算と相性が良く、研究の進展が見込まれます。洪水モデルで世界を旅し
た気分になれますので、興味のある方はご連絡ください。

■長尾毅：地震動増幅特性関係など 地震動は地表に伝播する過程で、地盤の剛性が深さ
方向に同一でないため増幅する。しかし、対象地点直下の地盤剛性が明らかになってい
ても直ちに増幅特性を評価することは出来ない。増幅特性は地盤の3次元構造や地震動入射
角度等、様々な要因の影響を受けるためである。また、通常地盤情報が得られている工学的
基盤（支持層）～地表間の増幅よりも、地震基盤～工学的基盤間の増幅の程度の方がは
るかに大きいことが一般的で、深層地盤条件の正確な把握は十分に成されていない。常時
微動観測や数値解析などで地点ごとの地震動の増幅特性を評価する研究を行っている。

■藤田一郎：河川表面流解析ソフト KU-STIV の開発 洪水流の流量は河川計画を策定す
る上で最も基本的な水文量であるにもかかわらず、これまでは精度や作業効率などに問題
のある浮子を使った計測しか実施されてこなかったために、近年、流量観測の高度化が検
討されてきた。今回開発したソフトは河川監視カメラ等の映像から表面流速分布を画像計
測して流量算定に利用するものであり、すでに商品化されていくつかの河川（信濃川など）
での試用が始まっている。KUはKobe Univ.、STIVはSpace Time Image Velocimetryの略
であり、10秒程度の動画から流速分布を簡単に計測できる特徴を有している。

■片岡沙都紀：十勝沖における表層型メタンハイドレート賦存地盤調査 海底下表層に分
布するメタンハイドレート（以下、MH）は、海底堆積土中での分解が原因で海底沈下や
海底地すべりなどの発生の可能性が懸念されている。そこで、これまで海底下表層に分布
するMHに着目し、その土質特性や海底地形、地質的要因等を考慮してMH賦存地盤の特
異性について工学的観点から研究してきた。今回の北海道十勝沖での調査では、海底下強
度を原位置で測定するために原位置コーン貫入試験装置を導入し、MH賦存の可能性があ
る海底地盤強度の測定を試みる。

■三木朋広：画像解析によるコンクリート構造物の性能評価 コンクリート部材の耐荷力
や耐荷機構の決定要因を分析するために、部材の破壊を捉える必要があります。本研究で
は、画像解析により平面領域を対象としたひずみ計測を行い、コンクリートのひび割れや
圧縮ひずみが卓越する領域を特定します。一般的な高解像度デジタルカメラの他、急激に
進展する部材破壊では高速度カメラを使用したり、非常に微細なひび割れにはマイクロ
スコープを利用したりと、状況に応じた測定を行います。一連の研究を通して、インフラ構
造の未来を想像し、創像する（未来のイメージと新たなビジョンを示す）ことを目指します。

■井料隆雅：ビッグデータと市民工学 昨今、世間では社会にあふれる膨大なデータを活
用しようという動きがさかんである。このようなデータは一般にビッグデータと呼ばれる
が、語感が先行し、その特性を活かした利用方法に関する議論はなおざりになりがちであ
る。そもそもデータを活用して意思決定を行うこと自体は目新しいことではない。交通工
学においても、都市の人や車の流れを観測し交通制御や計画に活用することはすでに半世紀
近い実績がある。その経験を活用しつつ、量的に成長したデータの特性を活かした「正しい」
活用方法を探ることを目的として、特に交通および防災の分野での研究を継続している。

■小池淳司：社会資本の経済効果とその計測と課題 社会資本の経済効果は多岐におよぶ、例えば道路整備事業の場合、その効果は単純な所要時間短縮だけでなく、物流の効率化やレジャーの拡大など我々の生活に影響をおよぼす。この効果計測に際して、ミクロ経済学の理論を用い、現実の社会経済をモデル化し、そして、シミュレーション分析を用いて計量化することが普及している。しかし、この社会経済のモデル化に際しては、数多くの仮説や仮定を用い、モデルを単純化している。これらの仮説や仮定がどの程度一般的であるかが、社会資本の経済効果の計測においても重要なカギとなり、一つ一つを検証している。

神戸大学紹介（駿河台予備校にて）

去る 7 月 3 日、駿河台予備校にて神戸大学工学部および市民工学科の紹介を行ってきましたので報告します。

- ① 日時：平成 26 年 7 月 3 日（木）17:40 から
- ② 場所：駿河台予備校 神戸校 大講義室
- ③ 講師：藤田 一郎先生（同行者：矢野㊟）



遅い時間の開始でしたが、現役の大学教授から直接、話を聞けるとあって受験生の皆さんは熱心に聞き入っていました。また講師の藤田先生も、パワーポイントにて『工学と理学の違い』、『市民工学（Civil Engineering）と建築学の違い』を分かり易く説明されておられました。我々の受験時代とは違い、少子化や建設業離れが深刻化する昨今では、このような情報発信は受験生および大学側にとっても非常に有益であると思いました。

近頃は『ドボ女』、『リケ女』、『けんせつ小町』なる言葉も流行するぐらい、女性の進出が著しい時代です。説明会後に講師の控え室まで来て『日本の技術力を生かし、海外勤務も想定内で他国を発展させる業種に就きたいのですが・・・』という女子が現れました。

先生も私も、これには大変驚きました。建設現場でも女性の所長が誕生する時代です。

これからは、各人の能力が十分に発揮できる分野で男女共同参画が進むと思われます。

来年度も、この説明会を継続していくとのことです。1 人でも多く神戸大学市民工学科に興味を持ち、建設業界を活性化してくれる人材が育つことを期待します。

文責：暁木会常任幹事広報 G 矢野 芳広 ㊟

海外インターンシップ助成金制度の設立

平成 26 年度学外実習担当 小池淳司

日頃から、暁木会からは本学の研究・教育活動に様々なご協力をいただき感謝しております。そのなかでも暁木会の皆様からの学術振興基金助成金の運用に関して議論してまいりましたが、このたび、新たに学生の海外インターンシップおよび海外短期留学の助成金制度を設立する運びとなりました。本制度はグローバル化する社会において、海外での見識を通じ、暁木会に代表される日本の市民工学技術を広く発信しうる若手研究者・技術者を育成する目的で、学部 4 年生および修士学生を対象に海外インターンシップおよび海外短期留学を希望する学生に渡航費の一部を助成するという制度です。本年度は、2 名の応募があり、両名に助成を実施することとしました。今後とも継続的に本制度を運用していきますので、なにとぞよろしくお願いいたします。以下、本年度海外インターンシップを終えた 2 名の学生による実施報告です。

米国での橋梁点検の体験

学 年 M1 氏名 中島朗博
場所： ワシントン DC (USA)
派遣先 NEXCO - WEST USA

ホワイトハウスから歩いて 5 分ほどの場所に、私のインターン先である NEXCO - WEST USA 社のオフィスがある。NEXCO - WEST USA 社は米国での橋梁点検を主たる業務としており、ハイビジョンカメラや赤外線カメラを用い点検を行っている。米国においては法律の改正により、すべての橋梁は 2 年に一回の点検を義務づけられた。(米国の橋梁数は約 60 万橋)また、それらのすべてに部材レベルの点検が義務化された。この法改正により、既存の点検方法では点検コストの増大や人材不足が問題となる。そこで効率的な点検方法が必要となった。NEXCO - WEST USA 社はこの新しくなった点検市場に参入し、実績ゼロの状態から様々な州でパイロット試験を行い実績を得て、現在では様々な州の点検業務を受注している。



今回のインターン期間中タイミングが良く、オハイオ州シンシナティの高速道路橋の点検に参加させていただくことができた。このシンシナティの現場は今までで最も規模の大きな現場であったそうで、点検する橋梁は大小さまざまで、数もかなりあった。この現場では、ラインカメラと呼ばれる高性能カメラでの路面の撮影と、赤外線カメラによる床板の撮影を行った。昼の明るいうちにラインカメラで撮影を行い、夜に赤外線カメラでの撮影を行った。撮影は次頁の写真のように、車にカメラを取り付け、対象橋梁を通常走行

することで行うことができ、道路を閉鎖する必要がなく、少人数で行うことが可能である。赤外線カメラを用いる点検においては気温が非常に重要であり、床板の温度と気温に差が生じている状態でないと赤外線画像から劣化部を判定することができない。今回の現場ではこの気温に悩まされた。

今回のインターンでは米国の橋梁点検の実情など、日本ではなかなか知ることのできないようなことを知れ、現場の体験もでき非常に貴重な経験ができている。貴重な体験をする機会を用意してくださった NEXCO - WEST USA 社の皆様方、インターン参加において様々なアドバイスをくださった方々、資金援助をくださった暁木会にお礼申し上げます。



EU でのシンクタンク業務の体験

学 年 B4 氏名 中村皓人

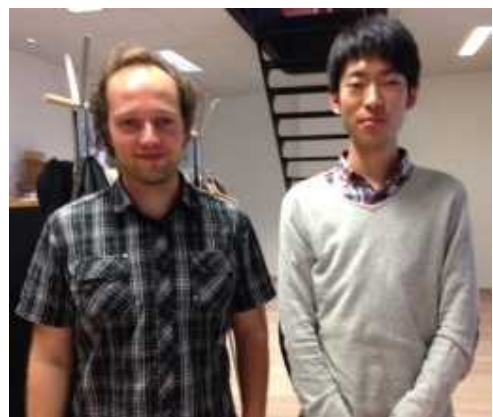
場所： ルーベン（ベルギー）

派遣先 Transport & Mobility Leuven

今回、ベルギーの TML (Transport & Mobility Leuven) という会社で二週間の研修を受けさせていただきました。私にとっては初めてのインターンシップです。自身の専攻する費用便益分析の応用を目で見て確かめたいという目的が第一にありましたが、特に海外での研修を望んだのは、英語力に関して自身に発破をかけたいという思いが強いからでした。

TML は交通に関するモデリングと政策分析を専門とし、地方や国の行政機関をはじめ、欧州委員会をも顧客に持ちます。多くの研究員の方が勤めておられる中、特に費用便益分析を専門とする方が私の研修を担当して下さることになりました。担当の方とメールのやりとりをしているうちに、自身の研修に対する期待は膨らみ、先に述べた目的以上のものが得られるという確信のもと、意気揚々として日本を出発しました。

最初の一週間は主にモデリングの研修を行いました。応用一般均衡モデルの構築を練習するのですが、頂いた資料が非常にわかりやすいのと、担当の方の的確なアドバイスのおかげで、それまで家計と企業を含んだだけの簡単なモデルしか構築できなかったのが、中間投入や政府、投資と貯蓄や国際貿易を取り込んだ、より現実的なモデルを構築できるようになりました。そして、どんなモデルにも限界があり、現実の経済をどのように解釈して何を評価の視点とするのか、その問題ごとにモデリングを考えなければならない、ということを教わり、改めて面白さを感じることもできました。そうした知識を得て、二週目は、実際の仕事について



いろいろと教えていただき、データ集めの手伝いや会議への出席などもさせていただきました。会議でのプレゼンは私のために英語でもらいましたが、TML 社内の会話は基本的にオランダ語。加えてベルギーではフランス語も公用語ですから当然フランス語も話されますし、さらにその日の会議はドイツ語で行われる予定でした。データ集めに関しても、私はスイス政府の公表しているものを集めていたのですが、英語では手に入らない情報も多くあり、驚くと同時に、語学の重要性を痛感せずにはいられませんでした。会社の方たちは外からの電話を取るたびに異なる言語を話されていて、仕事の幅を広げるためには語学が必須なのだということを目の当たりにしました。

とはいっても、私が会社の方たちとコミュニケーションを取るのには簡単な英語でも十分でした。皆さんが親切だったこともあります。英語の不出来は今回に限り大して問題に思うことはありませんでした。それ以上に私が問題に感じたのは、海外という環境であるていど余裕を失くして露呈した自身の未熟さでした。それは何も特別なことではなく、自分はベルギーまで来てようやく気付いたというべきことですが、そういったことも胸に、TML の皆さんには感謝しつつ、これからもいっそう勉学に励んでいきたいと思いました。

最後に、今回の研修は暁木会の助成金を受けてはじめて実現したものです。市民工学科の人には来年度からでもこの補助制度を利用されることをお勧めします。人さまざまでしょうが、チャレンジから得られるものは必ずあると思います。それに、こういった海外での人々との出会いは、観光では得られない本当に楽しいものです。自分も今後ともチャレンジの機会を逃さず、何事にも積極的に取り組んでいきたいと思っています。

現 役 最 前 線

山陰近畿自動車道 浜坂道路事業について

兵庫県新温泉土木事務所 浜坂道路第2課 芝本芳生 C05

平成 17 年 4 月に兵庫県に入庁し、今年で 10 年目を迎えました。八木下徹所長^③のもと、現在私が担当している浜坂道路事業について紹介させていただきます。

一般国道 178 号浜坂道路(延長 9.8km)は、日本海側唯一の「高速道路空白地帯」の解消を目的とした山陰近畿自動車道の一区間であり、兵庫県内で既に供用済みの香住・余部道路、東浜居組道路に引き続き、平成 20 年度に事業着手しています。浜坂道路はルートの大部



写真-1 新桃観トンネル西側坑口

分が山岳地帯を通過するため延長の約 7 割が構造物(トンネル・橋梁)で占められ、9 本のトンネル、7 本の橋梁が計画されています。トンネルについては、現在のところ 1 本が完成、6 本が工事中、残り 2 本も今年度中に着手予定です。施工延長が最も長い新桃観トンネル西工区工事(2,158m)では、平成 24 年 9 月に掘削を開始後、途中突発湧水などで 1 ヶ月間進行出来ない時期もありましたが、平成 26 年 9 月に掘削完了するなど工事進捗

は順調です。ちなみに、この現場では作業所長が暁木会の市原栄二先輩（安藤・間㊟）という縁もありました。浜坂道路は平成 29 年度の供用開始を目標に掲げ、これに向けた予算確保、工事の工程管理、幅転する各工事間の調整、難航する用地の取得など課題はたくさんありますが、通常行う県の事業よりも短期間で大規模な現場が完成していくことや見学会等を通じて地元の方々の期待や感謝の言葉を耳にできることを喜びに感じています。

浜坂道路は兵庫県の中でも大規模な事業ということで、広報活動にも力を入れており、記者発表・HP の充実、現場見学会の開催、パンフレット・広報誌の作成等を行っているほか、新たな取り組みとして“Facebook”を立ち上げ、日々の工事進捗はもちろんのこと、現場見学会の様子や地域の魅力等も含めた様々な情報を発信しています。

暁木会の皆様もアクセスしていただき、ぜひ「いいね！」してみてください。

URL : <https://www.facebook.com/shinonsen>



写真-2 現場見学会（トンネルツアー）



図-1 位置図



写真-3 Facebook のトップ画面

新制 26 回生 卒業 3 5 周年記念同窓会

平成 26 年 9 月 13 日（土）に卒業約 35 周年記念同窓会を神戸の六甲荘で開催しました。当日は、卒業生 35 名に加え、先生方も川谷先生、梅田先生、宮本先生、森津先生にご出席いただき、盛大にとりおこなうことができました。

卒業生は 58 歳、59 歳という年齢であり、定年退職前には是非皆で集まろうということで企画した同窓会です。ますますメタボになったり、髪の毛がほとんどなくなったり、6 年前に開催した同窓会から、さらに進化した姿で一堂に会しました。

仕事の話、家族の話に加え、関連会社への異動や今後の進路の話に花を咲かせました。宴会後の幹事部屋での二次会では、日付が変わるまで大いに語り合いました。

翌 14 日には、5 年後の再会を約束して帰途につきました。

報告者：新制 26 回生学年幹事 畑 恵介㊟



暁木地盤の会 実施報告

今回で6回目を迎えました暁木地盤の会の会合は、7月25日（金）に神戸大学工学部にて開催いたしました。18時より多目的会議室にて開始されました勉強会には、卒業生の皆様から在学生も含め60名近い参加をいただき、会場の席が満席になるほどの盛況ぶりでした。今回の勉強会では、27回の卒業生で神戸市建設局局長の末永清冬様に「神戸のこれまでのプロジェクトと今後について」ということでご講演を賜りました。神戸市の誕生から現在の取り組みなどをご説明いただき、参加者の皆様は非常に熱心に聞き入っておられました。



工学部食堂に場所を移して行われました交流会では、会場のあちこちから技術情報の話や在籍の頃の思い出話など、皆様話は尽きないといった様子でした。また、現在大学に在籍している学生達にとっては、先輩がたと就職等の話をお伺いできる貴重な場に参加できてよかったとの声もきいております。交流会の最後には、本会に遠くマレーシアの地よりお越しいただきました田中泰雄神戸大学名誉教授（18回生）より一本締めを頂戴し、散会となりました。本報告を締めるにあたり、多忙なところ本会にご参加くださいました多くの卒業生の皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご協力をいただけますようお願い申し上げます。また、本会は地盤系研究室の卒業生に限らず、地盤にご興味をもたれている暁木会会員の方々からのご参加もお待ちしておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



文責：片岡沙都紀（暁木地盤の会世話人）

大阪あかつき会 第24回例会

「ヒマラヤ処女峰を目指して」

阪・神・奈に縁のある方々の集いである「大阪あかつき会」の第24回例会が平成26年10月3日、畑暁木会会長をお迎えし、34名の参加を得て開催され、山田健氏（27回、兵庫県庁）に「ヒマラヤ処女峰を目指して」と題して、神戸大学山岳部・山岳会の活動について講演いただきました。

山岳会は1915年に創立され、戦前は台湾、1950年代は南米等に遠征していた。1970年代に入り世界の傾向とも合わせ、ヒマラヤ山脈に的を絞った。多数のシェルパ等を雇う商業登山が盛んになり、処女峰が徐々に減少していく中、1980年にクーラカンリ峰（7554m）の初登頂に成功し、また2009年にも浸食谷が深く、気候的にも厳しい東部ヒマラヤの中国ロプチン峰（6500m）の初登頂にも成功し、大学山岳界でその評価を高めている。

山田氏が副隊長を務めたロプチン峰遠征は、中国地質大学（温家宝前首相の母校）との共同登山であった。ロプチン峰があるカンリブル山脈は東部ヒマラヤに属し、長江・メコン等の源流域であり、大摺曲地域で浸食谷が深く、ベンガル湾からの風雲も多く、大変厳しい環境にある。このため処女峰が連なっている。

登山は登山許可・資金・隊員の確保等その8割が準備である。ベースキャンプを出発し、極地法により順次高度を上げる。幸い天候にも恵まれ抜群の登山能力を有するチベット族隊員2名が最終キャンプを飛ばし、初登頂に成功する。日本人隊員二人もその後初登頂に見事成功するが体力を消耗し遭難寸前の帰還であった。「登頂成功は隊の成功であり、アタック隊員個人の成功でない」との山田氏の言葉に、登山の難かしさ、楽しさを垣間見る思いがした。学術登山であり、地質学的にも新たな発見もあり、また登山を通じて日本・漢・チベット三民族の協調・融和も実現された。政情不安なチベットでの登山許可を得ることが出来たのは、長年に亘る地質大学との交流・友好関係があり、信頼関係が確立されているからであり、山岳関係者の垂涎の的のようである。貴重な写真と巧みなスピーチで大変面白い講演でした。講演後の懇親会も盛り上がり、時の経つのも忘れてしまう程で大盛況の例会でした。次回は平成27年10月2日（金）の開催を予定しています。自由な集いです。皆様の参加をお待ちしています。

文責：池野 誓男⑫



平成 26 年度 暁木会東海支部総会

1. 日 時 平成 26 年 9 月 10 日（水）18：30～20：30
2. 会 場 名古屋駅前 第 3 堀内ビル 百楽
3. 出席者 来賓：内山雄介准教授、河村優一本部副会長、支部会員：12 名
4. 議 事 暁木会総会報告
平成 25 年度会計報告
平成 25 年度監査報告

平成 26 年度の東海支部総会は、細見支部長をはじめ 12 名の会員が参加し開催されました。議事後、来賓としてお越しいただいた内山准教授と河村本部副会長より、大学の近況や暁木会本部の活動についてご報告いただきました。

総会後の懇親会では、終始リラックスした雰囲気の中、職種や世代を超えて会話が弾み、懇親を深めました。

報告者：暁木会東海支部事務局 名古屋鉄道株式会社 川野幸一 C02



内山准教授 大学近況報告



支部助成金 授与



集合写真

平成 26 年度名簿発行について

今年度は 2 年に 1 度の名簿改訂の年となっております。暁木会会員の皆様方には改訂した名簿と共に 12 月発行の No.28 暁木会ニュースをお届け致します。名簿改訂にあたり、誤記あるいは未更新等不十分な点多々あることと思います、ご容赦をお願いするとともに訂正等ございましたら、大変申し訳ありませんが、下記連絡先までご連絡をお願い致します。今後も更に充実した暁木会の内容をお届けできるよう取り組む所存ですので、皆様方のなご協力をお願い致します。

なお、会員の個人情報につきましては、名簿を所有する会員の皆様で管理徹底して頂きますようお願い致します。

年会費納入状況について

平成 15 年度から現在、1,100 余名(会員総数 3600 余名)を数える会員の皆様方の会費によって、暁木会の活動を進めております。会員の皆様には、暁木会の活動にご支援・ご協力を賜り、本誌をもって厚くお礼申し上げます。

しかしながら、暁木会の安定した運営を行うためには、未だ十分な財源が確保できておりません。現在、KTC のメーリングリストや、クラス幹事、各職場の世話人を通じて会費納入の依頼を行っているところです。会費会員へのサービスとしては、暁木会ニュースおよび会員名簿の発行をさせていただいております。会費納入の手続きが未了の会員各位には、手続き関連書類を送付いたしますので、下記の連絡先にご連絡くださいませ。よろしくお願い致します。

※年会費(3000 円)の集金方法につきまして、集金代行業者(三菱 UFJ ニコス株式会社)に委託し、会員の指定金融機関から年 1 回の自動引落しの制度を採用いたしております。

暁木会からのお知らせ

平成 27 年 2 月 4 日 第 132 回暁木一水会

平成 27 年 3 月 25 日 暁木会総会

「会の詳細は約一月前から HP でも掲載しますので、ご確認頂けますと幸いです。」

おわりに

最後になりましたが、業務多忙の折、執筆を引き受けてくださった皆様、名簿改定にあたり、ご協力を頂きました学年幹事様及び各企業の職場担当の皆様ならびに名簿編集委員の皆様には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

発行者：暁木会
 連絡先：常任幹事 広報 G 小川 修隆 院 28
 株式会社竹中土木 大阪本店
 TEL：06-6252-4084 FAX：06-6271-0743
 E-mai：ogawa-n@takenaka-doboku.co.jp